Izumi KATO

The Yomiuri Shimbun,

奇妙な世界観　物語を想像

%041 %2023

アートの栞（しおり）

奇妙な世界観　物語を想像

「無題」　加藤泉（2022年）

人面を持つ4本足の造形物の頭や背中などには、ゴリラや馬、鳥、クワガタが乗っている。かわいさと不気味さを併せ持つ架空の生命体（？）に、造形がリアルで縮尺がバラバラなプラモデルの動物。これらのズレが、奇妙な世界観を醸し出している。「これは一体何？」「どんな状況？」。見る者の想像力をかき立ててやまない。

美術家の加藤泉さんは、1990年代に画家としてキャリアをスタートさせた。胎児や宇宙人、精霊を思わせるヒト型の生命体を毒々しい色彩で描き、注目を集めた。その後、木やソフトビニール、石、布と、扱う素材の幅を広げ、ヒト型のモチーフを立体作品に落とし込むようになった。

コロナ禍のこの数年、スタジオで過ごす時間が増えた。「趣味として」プラモデルを作っていたところ、ふと、木彫作品などと組み合わせることを思いついた。

「『ペインター（画家）』という意識が強い」と言うだけに、絵は根を詰めて描く。それに対し、彫刻は「絵のためにわりと気軽に楽しみながら作っている」と言う。そんな遊び心が、思いがけない組み合わせに結びついたのだろう。

作品は不気味さが中和され、ほんわかとした温かさやおかしみがにじむ。「自分の作品にしては珍しく物語性を帯びたシリーズ」。木彫の背中の動物たちの間で繰り広げられる会話が聞こえてきそう。よく見れば、ソフトビニール人形の作品もちょこんと背中に乗っている。木彫、ソフビ、プラモデル――。楽しさを生み出す作品展開の集積である。

（文化部　森田睦）

＊かとう・いずみ　1969年、島根県生まれ。美術家。絵画をはじめ、木、石、布、ソフトビニールといった幅広い素材を使って制作。アメリカや中国の美術館で個展を開くなど、国際的に活躍している。

＊「加藤泉―寄生するプラモデル」
コロナ禍の間に、既製のプラモデルを使って制作した彫刻作品を中心に展示。作品がモデルのプラモデルもある。東京・神宮前のワタリウム美術館で、3月12日まで。月曜休館。

アートINFO

■秀逸企画賞に2館
規模を問わず、優れた内容の美術の企画展を表彰する「第10回秀逸企画賞」（日本アート評価保存協会主催）に、「日本の中のマネ―出会い、120年のイメージ―」展（東京・練馬区立美術館）と、「だるまさんといっしょ」（広島・筆の里工房）が選ばれた。両館にはそれぞれ副賞30万円が贈られる。

■円空大賞展
「円空大賞」（岐阜県主催）の受賞者の作品が、岐阜県美術館（岐阜市）で円空仏と共に展示されている。3月5日まで。

今回の円空大賞は、テキスタイルデザイナーの須藤玲子さんが受賞。円空賞は英国出身の彫刻家、デイヴィッド・ナッシュさん、陶芸家の中島晴美さん、彫刻家の舟越桂さん、現代美術家の三島喜美代さんが受賞した。

■横浜美術館オンライン講座
「丹下健三と横浜美術館の建築」をテーマに建築家・丹下健三の下で働いた堀越英嗣・芝浦工業大名誉教授が語る。18日午前10時30分～午後0時30分。ウェブ会議システム「Zoom」で参加。無料。先